

2. 各感染症状況報告

1) インフルエンザ定点把握疾患

●インフルエンザ

平成26年の全インフルエンザ患者報告数は95,872例で、年平均定点報告数は6.01で過去6年間(例外的であった平成21,22年を除く)の平均3.40と比較して1.7倍に増加しやや大きな流行となった。平成25/26年シーズンは平成26年第1週に1.66となり流行期が開始した。流行のピークは1月の第5週で、定点あたりの報告数が30.5と例年とほぼ同等の報告数であった。その後漸減し、2月第8週で19.2となるが翌9週には22.3とやや増加して2番目のピークとなり、さらに翌10週には18.2と減少するが翌11週には再び18.3と微増した。以後漸減したが例年に比べ減少傾向は鈍く、流行は遷延し、3月14週には4.76となり4月第19週に0.77と1を下回り終息した。平成26年1-3月期の流行の特徴は、2月9週にもピークとなる2峰性の流行となった点であり、2峰目の流行の規模は例年よりやや大きく、府内のほぼ全ブロックで認められた。特に豊能、大阪市東部、北河内、中河内、南河内、大阪市北部に認められた。

平成26/27年シーズンについては、平成26年11月48週に報告数が1.49と例年より3週間ほど早く1を超え流行期となり、51週には18.3と注意報レベルを超え、さらに翌52週には34.3と警報レベルを超えた。最近10年間では最も早く警報レベルに達したシーズンであった。年齢別年間患者報告数は本年は6歳が最も多かったが、4-8歳では6000代と同様な報告数であった。

2013/2014シーズンのインフルエンザウイルスの型/亜型の検出状況を見ると (http://www.iph.pref.osaka.jp/infection/influ/shingataH25_26.html)、

2013年9月から2014年5月までに検出された261株中A(H1N1)pdm09は136株(52%)、A(H3N2)は42株(16%)、B型は83株(32%)でH1が半数を占めた流行であった。2013年の前流行期(9-12月)に検出されたウイルス型/亜型(n=43)の割合は全シーズンでのそれとほぼ同等の46%、19%、35%であった。2014年1-3月における各型/亜型の検出頻度はA(H1N1)pdm09ではそれぞれ76%、53%、27%、A(H3N2)は18%、9%、14%、B型は6%、38%、59%であり、1月の主流の原因ウイルスはA(H1N1)pdm09で、2月にはA(H1N1)pdm09の流行が約半数で認められ、B型の流行が約40%と増加し、3月にはA(H1N1)pdm09が衰退しB型がさらに流行して60%と主流を占めた。4,5月は8株と少ない検出数であったが、B型が大部分を占めた。このように型/亜型がシフトして流行するパターン、特にB型が流行の後期を占める現象は例年よく見られるものであった。一方、H25/26年シーズンについては9-12月に検出されたウイルスはA(H3N2)が圧倒的多数の98%(123/126)を占め、他の3例はB型であった。

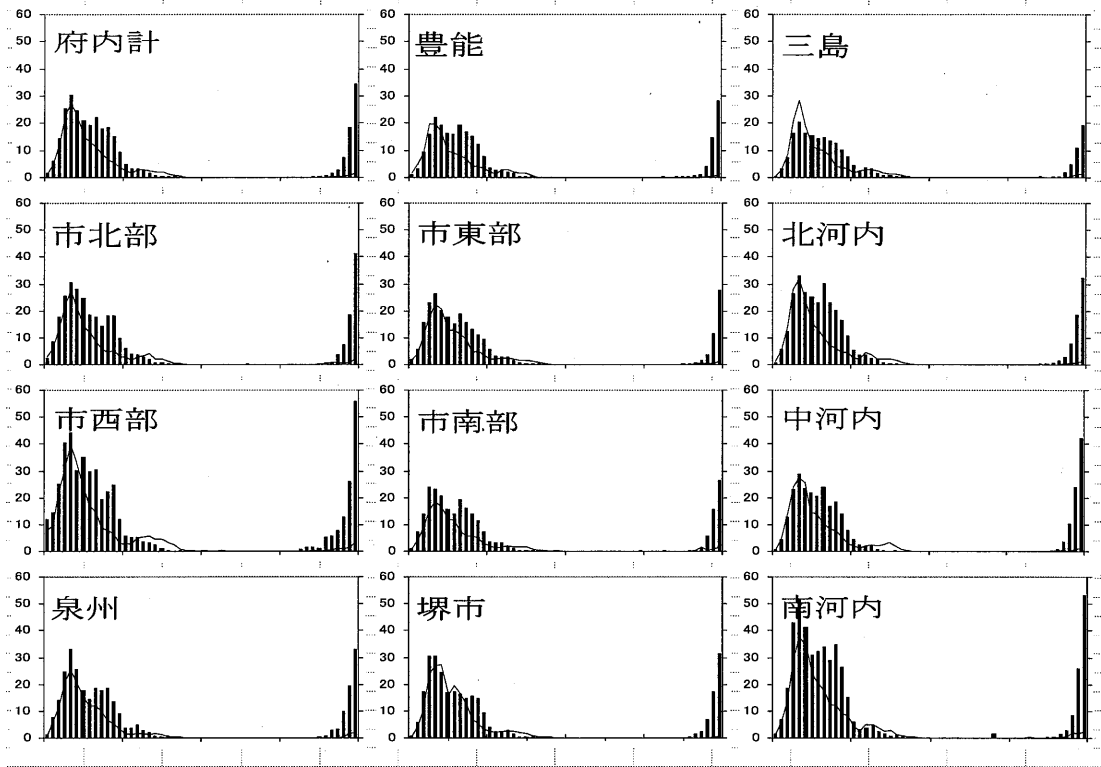
大阪府立公衆衛生研究所で2013/2014年シーズンに分離されたA(H1N1)pdm09亜型から無作為に50株抽出し、オセルタミビル耐性遺伝子の変異を確認した結果、2株で変異を確認した。その2株は共にオセルタミビルには約370倍、ペラミビルには約110倍感受性が低下していたが、ザナミビル、ラニナミビルには感受性であった。無作為に抽出したA(H3N2)亜型、B型それぞれ4株について上記4種の抗インフルエンザ薬に対する感受性試験を行った。その結果全ての株が4種の薬剤に対して感受性を示した。

(文責：高橋)

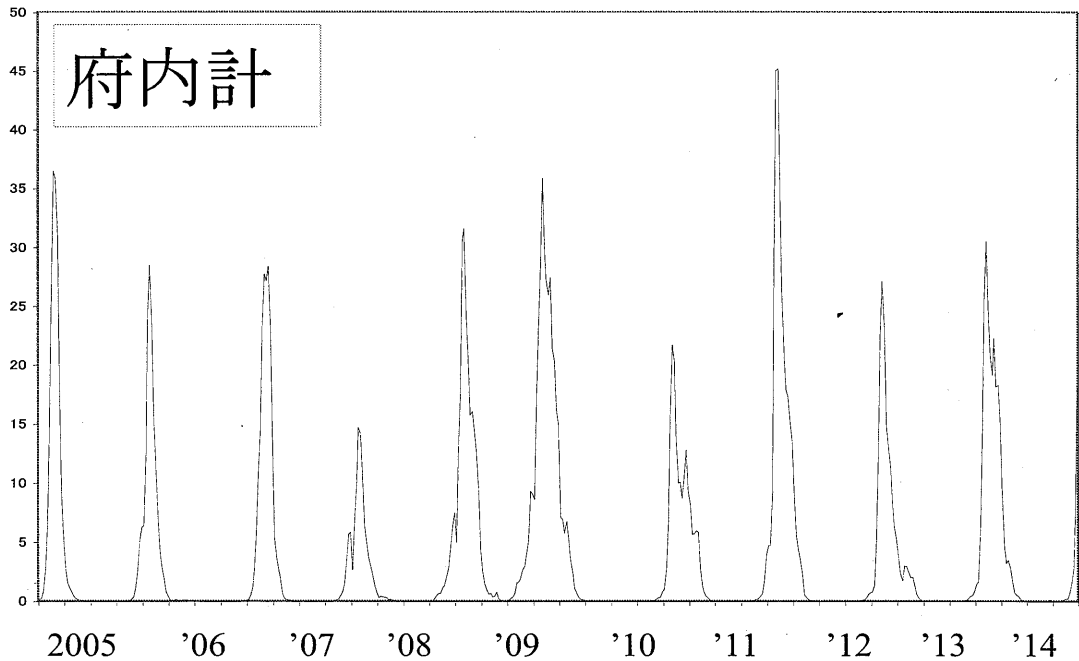
インフルエンザ

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)



2) 小児科定点把握疾患

●RSウイルス感染症

平成26年RSウイルス感染症の報告数は8,574例で、前年より518例、6.4%増加した。小児科・眼科定点報告対象13疾患総報告数の6.4%を占めている。定点あたり報告数の年平均は0.83で、全対象疾患中4位であった。全国集計の報告数は100,394例で、前年より3,860例、4.0%増加した。総報告数の4.9%を占め、定点あたり年平均0.61の報告があり、対象疾患中第5位であった。

大阪府における週別の定点あたり報告数は、第2週に1を超えたが、その後漸減し、第25週に年間最低値の0.07となった。翌26週以降は増加に転じ、36週に1.30、37週に2を超え、50週に年間最高値の3.19となった。

RSウイルス感染症の報告数は、例年冬期にピークが見られ、夏期は少ない状態が続いていたが、平成23年からは夏期から増加傾向がみられ、平成26年も前年と同様36週で1を超えた。また、平成25年の最高値は1.76であったが、26年は3.19に増加した。全国も同じ傾向で、最高値は50週の2.60であった。

全国の年間報告数は、23年70,876例であったが、24年は98,010例、25年が96,534例、さらに26年は100,394例と増加している。

年齢別報告例数は、0歳児が3,413例で全体の39.8%、1歳児が2,873例で33.5%と、2歳未満で73.3%を占めた。さらに3歳児まで含めると、全体の95.0%を占めている。小児の感染症において、RSウイルス感染症は、初感染が低年齢であるほど、その症状が顕著に現れ、重篤性が増す極めて重要な疾患である。今後も一年を通じた報告数の推移について、より一層の注意が必要であるとともに、パリビズマブ投与の対象となる児については、流行初期において投与を考慮されたい。

ブロック別の年間平均報告数を定点あたりで見ると、⑤南河内 1.34、⑨大阪市西部 1.33、⑧大阪市北部 1.22、③北河内 1.05、④中河内 1.04、⑦泉州 0.74、⑪大阪市南部 0.62、①豊能 0.57、⑩大阪市東部 0.55、⑥堺市 0.53、②三島 0.39 と続いた。

病原体定点医療機関からのRSウイルス検出数は、年間43件あった。検出数の最も多い月は9月の9件で、ついで8月と11月、12月の7件であった。年齢別検出数は、0歳～3歳児で41件と、年間検出数の95.3%を占めており、同年齢報告数の比率と同様に高かった。

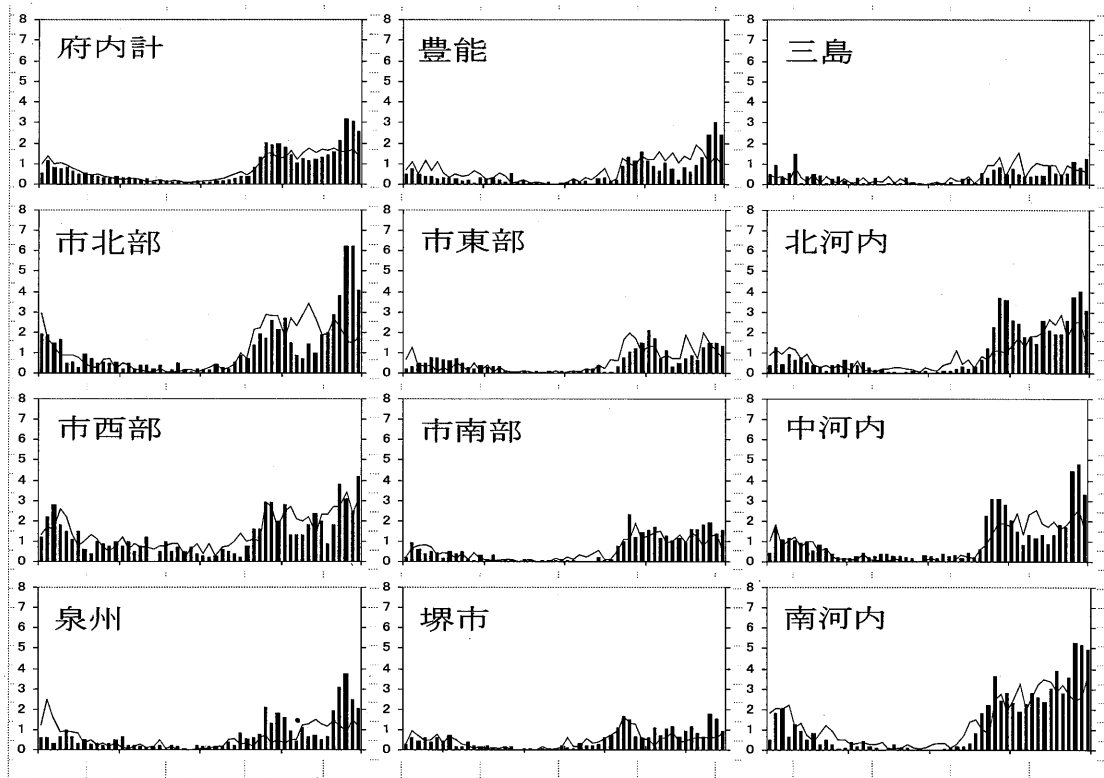
疾患別では、下気道炎が39、RSウイルス感染症が2と呼吸器系疾患が41件あり、年間RSウイルス検出数の95.3%を占めた。

(文責：永井)

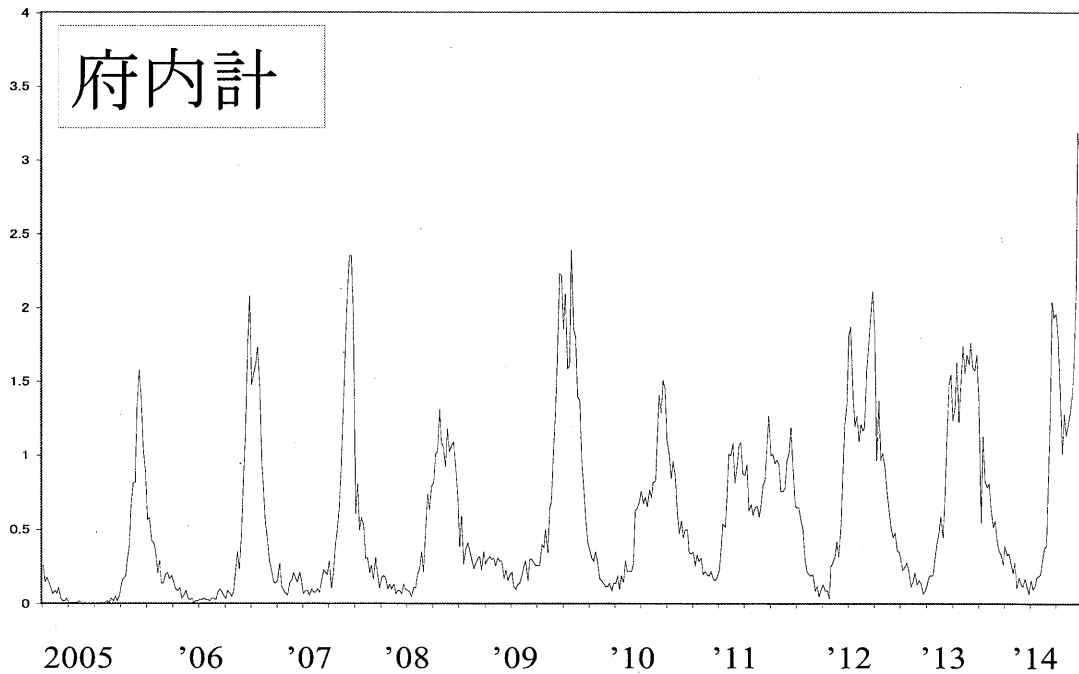
RS ウイルス感染症

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)



●咽頭結膜熱

平成26年の咽頭結膜熱の報告数は5,825例、平成25年の3,924例に比し、1,901例、48.4%の増加を示した。定点あたり報告数は平均0.56で、平成24年定点あたり報告数0.38より47.4%増加した。6年ぶりの大きな流行であった。

平成26年大阪府13疾患総報告数134,809例の4.3%を占め、多い順では第6位であった。平成26年全国の咽頭結膜熱の報告数は78,965例で、全国13疾患総報告数の第8位であった。

週別の定点あたり報告数では、第17週(4月)に0.5を超え、第20週(5月)には0.7を、第22週(5月)には1.1を超え、第23週(6月)には1.2を超えて、ピークを形成した。第28週(7月)には1.0を下回り、第33週(8月)には0.8を下回り、第37週(9月)には0.7を下回って、減少した。

月別では6月の1,161例が最も多く、次いで7月の718例、5月の649例、8月の589例、9月の551例と続く。夏型感染症と言える。

年齢別では1歳児の1,359例が最も多く、次いで3歳児の943例、2歳児の850例、4歳児の791例、5歳児の555例、0歳児の415例であった。0歳から5歳までの就学前児童の報告数4,913例は全報告数の84.3%を占める。乳幼児期の感染症と言える。

ブロック別では、④中河内983例が最も多く、次いで③北河内858例、⑤南河内798例、⑦泉州634例、⑧大阪市北部602例の順に報告数が多い。

ブロック別の定点あたり報告数の年平均では⑤南河内0.96が最も高く、次いで④中河内0.95、⑧大阪市北部0.83、③北河内0.61、⑦泉州0.58の順に高かった。

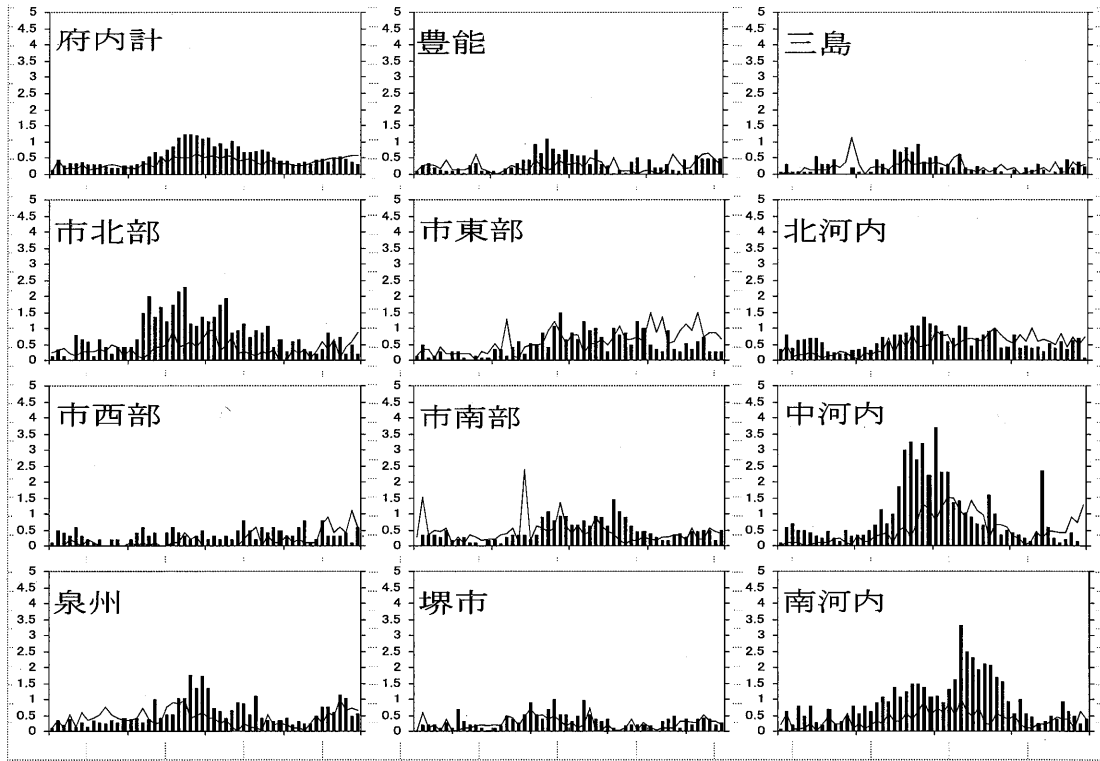
ウイルス検出は46検体中35検体が陽性、陽性率は76.1%であった。検出ウイルスは多い順にアデノウイルス(A d)3型が15件、A d 2型が9件、A d 1型・A d 54型が3件、A d 4型・A d 6型が2件、ライノウイルスが1件であった。

(文責 信田)

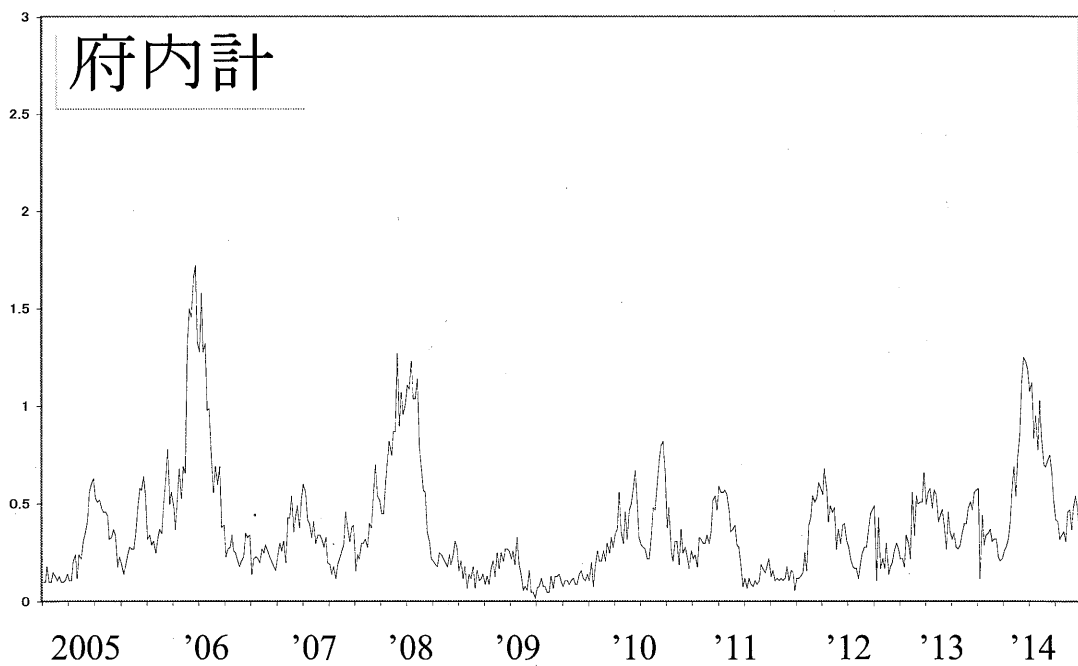
咽頭結膜熱

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)



●A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成26年の患者報告数は前年比14.9%増の20,821例で、総報告数の15.5%を占めた。定点あたりの報告数の年平均は2.01で、順位は昨年同様の第2位であった。

全国集計でも同様の傾向を示し、報告数は前年比19.8%増の304,272例であった。総報告数の14.9%を占め、定点あたりの報告数の年平均は1.86で、順位は昨年同様の第2位であった。

週別（月別）の定点あたりの報告数の推移では、第4・5週（1月）、第9週から第11週（2月～3月）、第17週（4月）、第19週から第28週（5月～7月）、第46週から第52週（11月～12月）で2.0を超え、ピーク値は第22週の3.94であった。初夏と冬期に二峰性のピークを作る傾向は、例年と同様であった。

全国的には第4週から第6週（1月～2月）、第8週から第11週（2月～3月）、第16・17週（4月）、第20週から第27週（5月～6月）、第46週から第52週（11月～12月）で2.0を超え、ピーク値は第50週の2.99であった。

年齢別患者発生数は4歳児の2,906例が最も多く、以下5歳児（2,866例）、6歳児（2,419例）、3歳児（2,260例）と続き、3歳児から6歳児で全体の50.2%を占めた。

定点あたりの報告数年平均の上位5ブロックは、④中河内（2.61）、⑤南河内（2.60）、⑥堺市（2.46）、①豊能（2.37）、⑦泉州（2.20）の順であった。最下位は②三島（0.82）であり、上位のブロックとは約3倍の差がある。

ブロック別・週別定点あたりの報告数の上位5ブロックは、⑤南河内（第22週、7.19）、⑤南河内（第21週、6.63）、⑤南河内（第24週、5.69）、③北河内（第20週、5.52）、④中河内（第22週、5.25）の順であった。

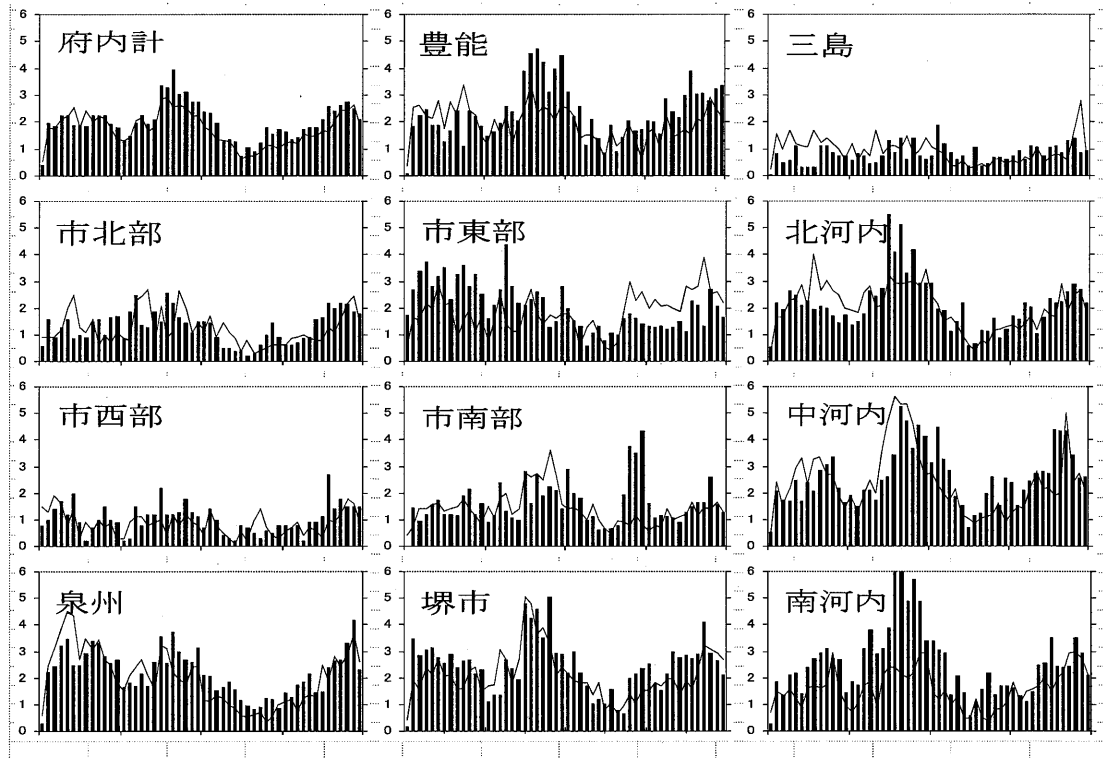
ブロック別年平均報告数、週別報告数ともに③北河内、④中河内、⑤南河内での報告数が目立った。

（文責：八木）

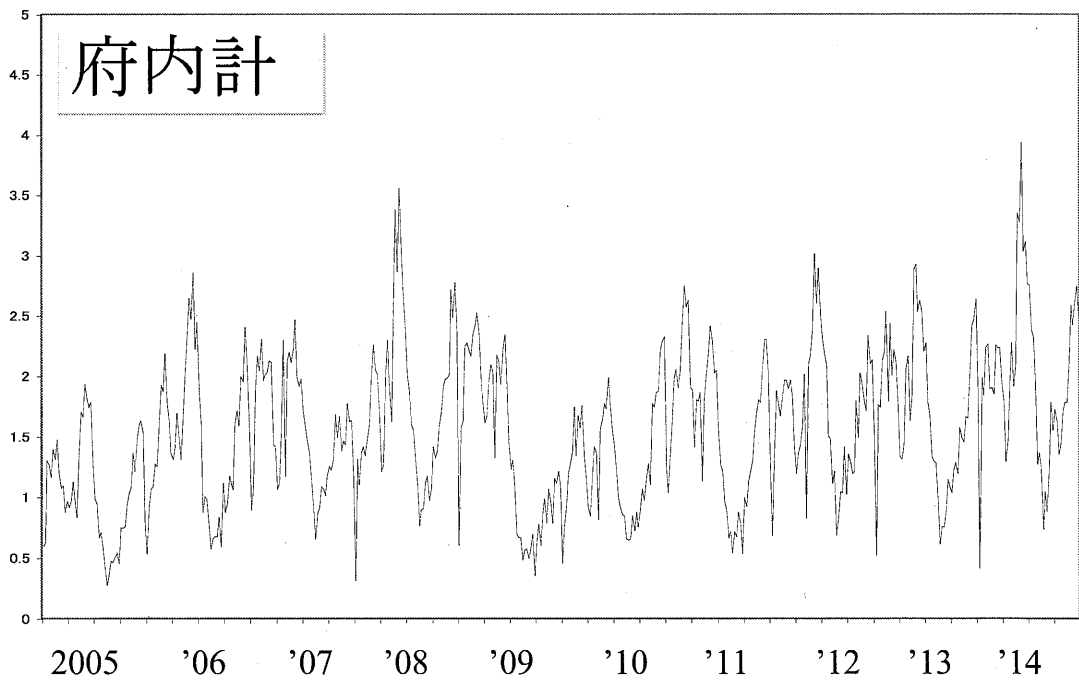
A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)



●感染性胃腸炎

平成26年の感染性胃腸炎の報告数は68,961例、前年より3,010例、4.6%増加した。小児科・眼科定点報告対象13疾患総報告数の51.2%を占め、第1位であった。定点あたり報告数は年平均6.67で、前年6.37より増加し、ほぼ平年並みの流行であった。

全国集計では報告数1,005,079例で、総報告数の48.9%を占め、定点あたり報告数は年平均6.15と前年6.56より減少した。

週別の定点あたり報告数は、第2週から第5週に8～9と増加した後、再び第15週から増加、第17週に年間最高値11.71に達した。第21週以降は減少に転じ、第33週に年間最低値2.47となった。第43週より再び増加、第49週に後半のピークである11.44に達した。全国集計では、第2週から増加し、大阪府より早い第4週に年間最高値12.10に達した。後半は第46週から増加し、大阪府よりやや遅い第51週11.54に達した。

月別報告数は、5月、12月、1月、4月、11月、3月の順に多かった。春から初夏に二峰性のピークを作り、夏から秋にかけて低値をとり、晩秋に再び増加し、12月にピークを持つ流行曲線は例年と同様であったが、前年と比べ12月のピークはやや低かった。

ブロック別にみると、定点あたり報告数が警報開始基準値20.0を超えたブロックは⑤南河内の1ブロックのみで、第20週22.50、第49週21.13をピークに警報レベルを2度超えた。次いで⑦泉州の第17週18.86が高値であった。

ブロック別の定点あたり報告数の年平均は、⑤南河内10.23、④中河内9.40、⑦泉州8.91、③北河内8.89、②三島5.93、⑧大阪市北部5.92、①豊能5.17、⑨大阪市西部4.76、⑪大阪市南部4.58、⑩大阪市東部3.65、⑥堺市3.49の順であった。

年齢別報告数は、1歳、2歳、3歳、4歳、5歳、0歳の順に多かった。0～4歳の報告数は37,792例で全体の54.8%を占めた。5～9歳が18,634例(27.0%)、10～14歳が5,496例(8.0%)、15歳以上が7,039例(10.2%)で、各年齢群の全体に占める割合は例年とほぼ同じであった。

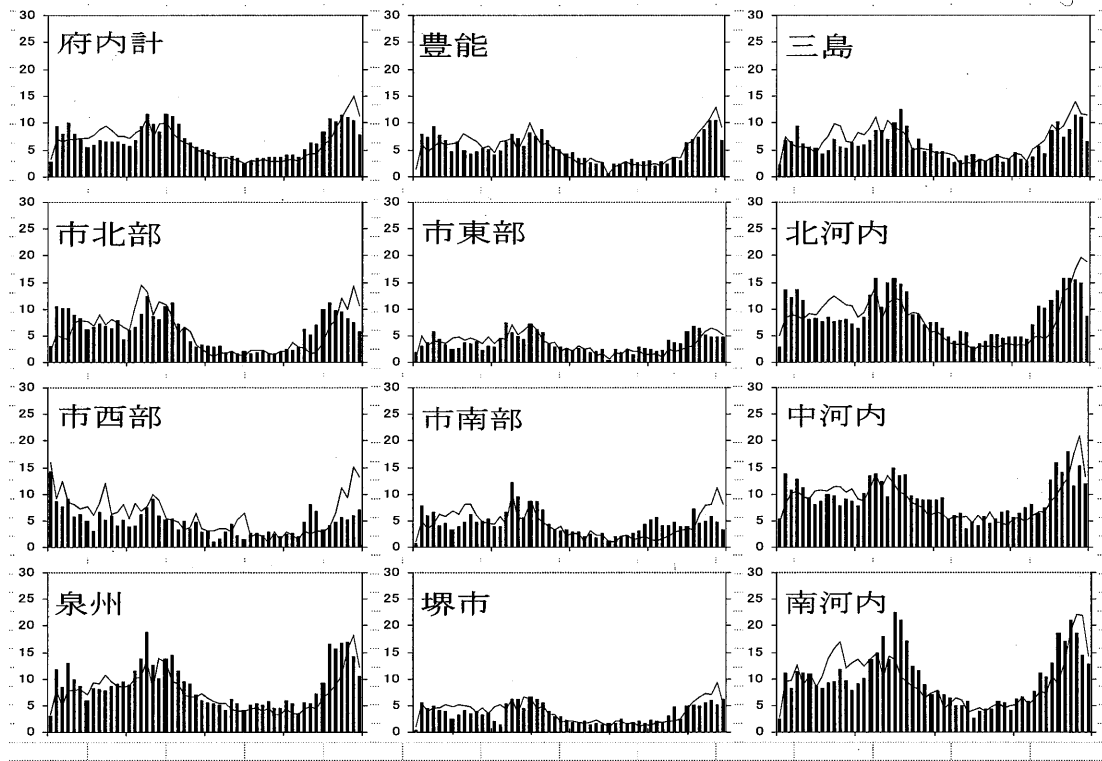
ウイルス検出は269検体のうち151検体が陽性、陽性率56.1%であった。病原体別で見ると、ノロウイルスGⅡが64件(陽性検体の42.4%)、A群ロタウイルスが31件(20.5%)、サポウイルスが13件(8.6%)で、この3種類のウイルスで全体の7割を占めた。

(文責：松浪)

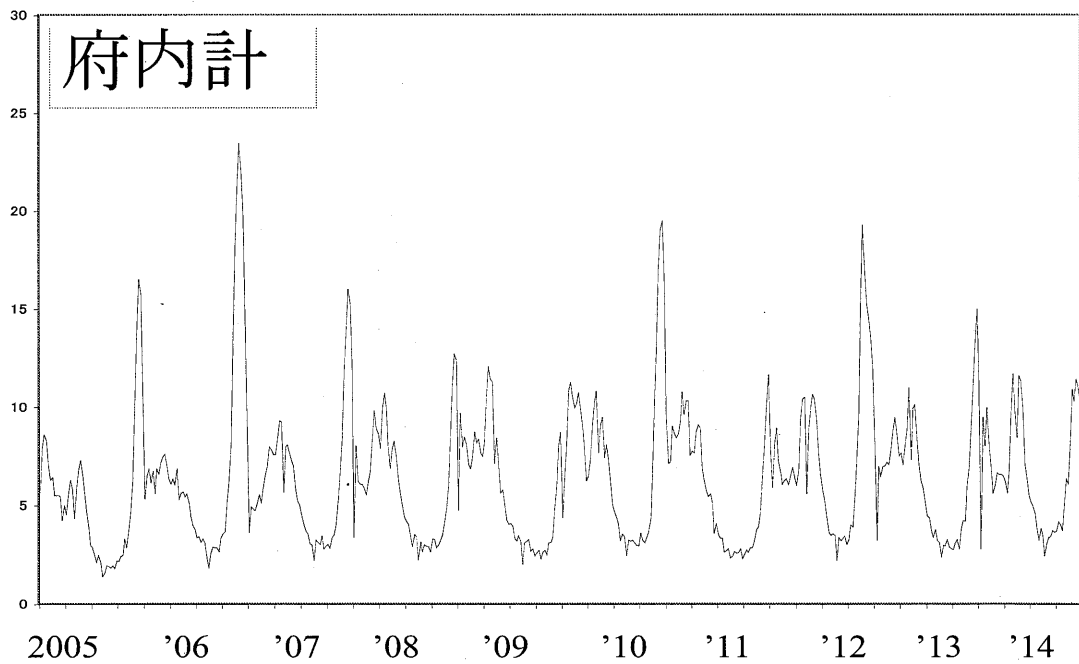
感染性胃腸炎

線（H25年第1週～第52週）

棒（H26年第1週～第52週）



線（H17年第1週～H26年第52週）



●水痘

平成26年の水痘の報告数は、9,776例であった。総報告数（小児科・眼科定点報告対象疾患）の7.3%を占め、対象疾患中、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎に次いで第3位であった。定点あたり報告数の年平均は0.94で、前年（0.96）とほぼ同程度であった。全国集計では157,666例の報告で、総報告数の7.7%を占め、定点あたり報告数の年平均は0.96で前年（1.07）より10.3%減少した。

定点あたり報告数を週別にみると、第1週1.02から第2週に本年最高値となる2.33まで増加した後、増減を繰り返しながら減少して第17週0.82となった。その後再び増加して第19週1.47となり、一旦やや減少後、第24週1.49となった。これは本年第3位及び第2位の値であった。増減を繰り返しながら減少し、本年最低値となる第38週0.35となる。それ以降0.35から0.63の間で推移するが、第42週0.53より増加に転じ、第51週に1.37に達した。全国集計では、本年最高値となる第2週2.18から減少し、第3週1.10以降は増減を繰り返しながら減少し、第16週に0.88となった。その後増加に転じ第22・23週に1.35に達した。これは本年第3位の値であった。その後減少し本年最低値である第35週0.42となった。その後再び増加に転じ第51週には1.27に達した。

定点あたり報告数の月別平均値は、1月、5月、12月、6月、2月、7月、4月の順に高かった。冬と春に二峰性のピークを作り、夏から秋にかけて低値をとる流行曲線は例年と同様であった。

年齢別報告数（0～9歳）は、3歳児、2歳児、4歳児、1歳児、5歳児、6歳児、0歳児の順に多かった。0～4歳の報告数の合計は6,691例で全体の68.4%を占めた。5～9歳が2,753例（28.2%）、10～14歳が253例（2.6%）、15歳以上が79例（0.8%）で、各年齢群の全体に占める割合は例年とほぼ同じであった。

定点あたり報告数の年平均をブロック別にみると、⑤南河内1.62、⑧大阪市北部1.45、④中河内1.38、⑦泉州1.01、③北河内0.97、⑥堺市0.75、②三島0.69、⑩大阪市東部0.68、⑨大阪市西部0.67、⑪大阪市南部0.63、①豊能0.57の順であった。

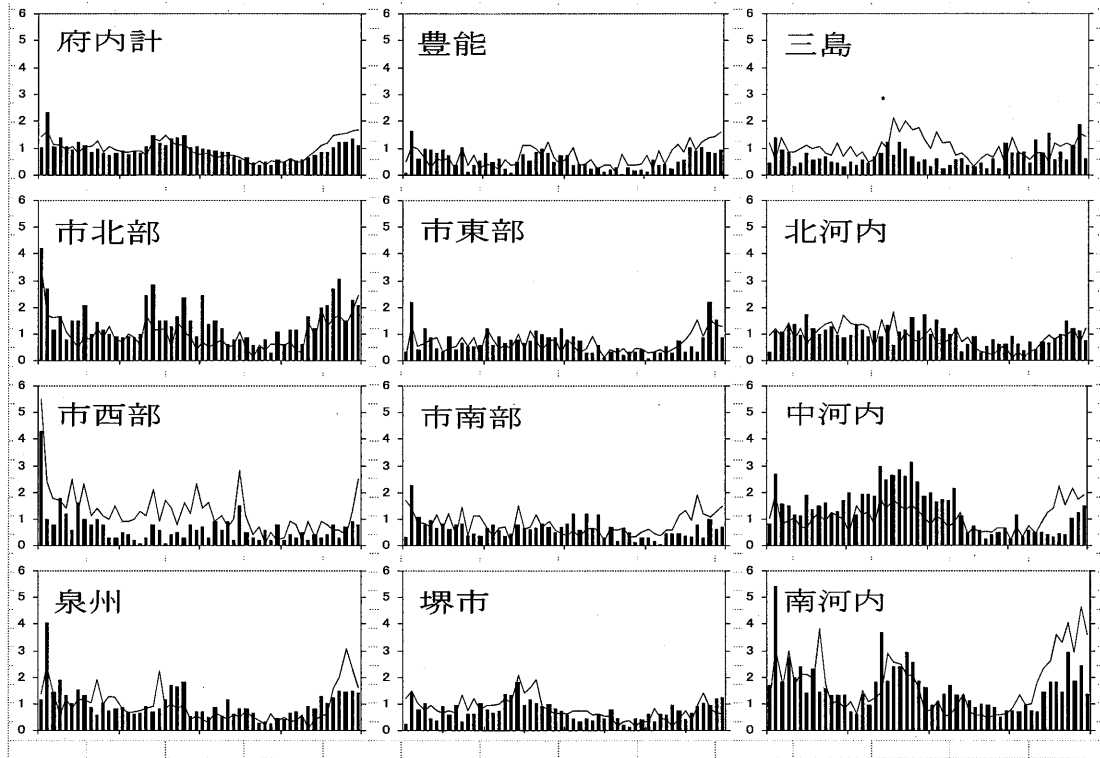
検体は2件提出されたが、ウイルスは検出されなかった。

（文責：吉田）

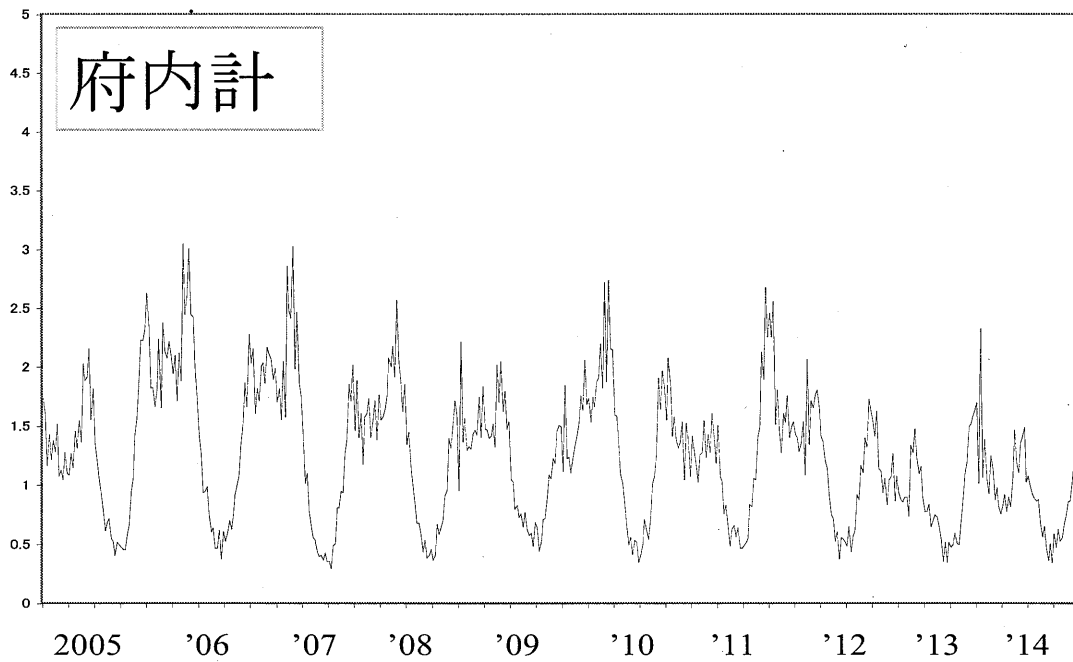
水痘

線（H25年第1週～第52週）

棒（H26年第1週～第52週）



線（H17年第1週～H26年第52週）



●手足口病

平成26年の手足口病の報告数は2,239例で、平成25年の14,964例に比し、12,725例、85%の減少を示した。定点あたり報告数は平均0.22で、平成25年定点あたり報告数1.44の85%減であった。昨年の大流行に比し、平年並みよりも小さな流行であった。

平成26年の大阪府13疾患総報告数134,809例の1.7%を占め、多い順では第8位であった。全国の手足口病の報告数83,694例は、全国13疾患総報告数では第7位であった。

週別の定点あたり報告数では 第23週(6月)から0.2を超え、第24週(6月)には0.3を、第25週(6月)には0.4を、第27週(6月)には0.5を超えてピークを形成した。第28週(7月)から緩やかに減少し、第34週(8月)には再び0.3を超えて、第39週(9月)まで2回目のピークを形成した。第40週(9月)から再び減少し、第46週(11月)には三度目の0.3を超え、第49週(12月)には0.4を超え、第50週(12月)には0.5を超えて、ピークを形成した。

月別では 6月380例が最も多く、次いで12月343例、7月318例、9月308例、11月246例、8月226例と続く。例年は夏型感染症であるが、26年は11月12月にも多くの報告があった。

年齢別では 1歳児699例が最も多く、次いで2歳児466例、3歳児306例、4歳児204例、0歳児177例、5歳児147例であった。0歳から5歳までの就学前児童の報告数1,852例が全体の82.7%を占めた。乳幼児期の感染症と言える。

ブロック別の報告数では ⑤南河内392例が最も多く、次いで、③北河内326例、⑦泉州323例、④中河内248例、⑧大阪市北部188例の順に報告数が多い。

ブロック別の定点あたり報告数の年平均では ⑤南河内0.47が最も高く、次いで、⑦泉州0.30、⑧大阪市北部0.26、④中河内0.24と続く。

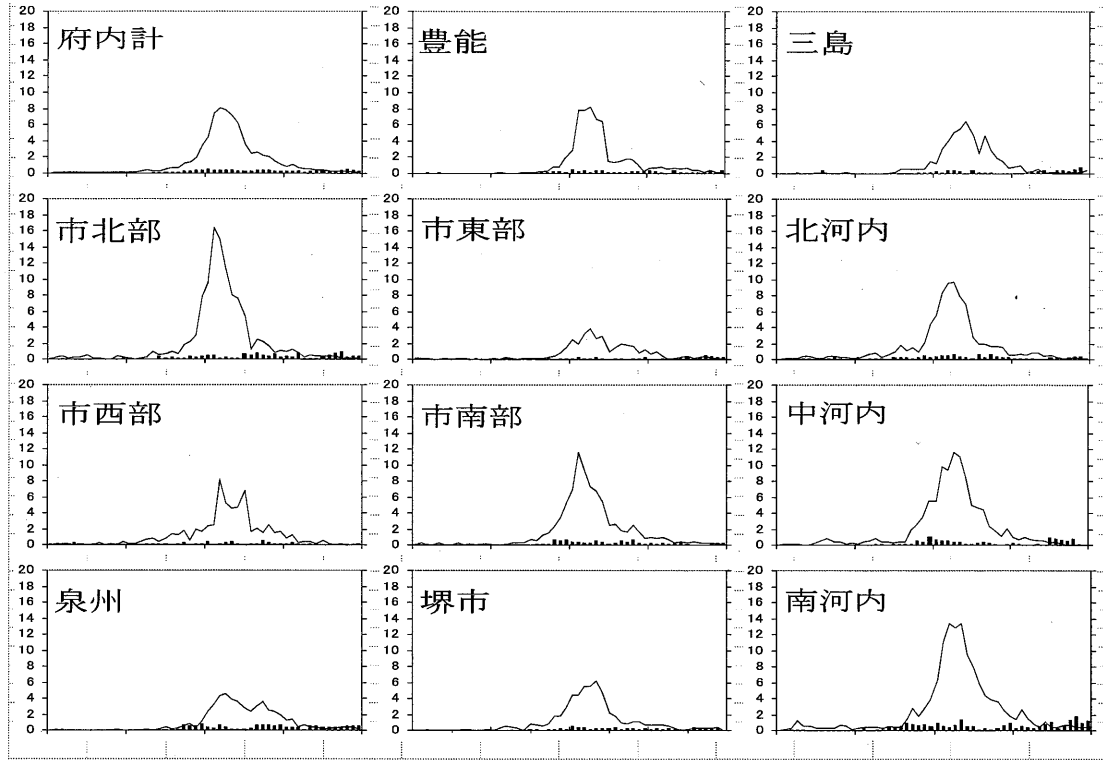
ウイルス検出は41検体中28検体で陽性、陽性率は68.3%であった。検出ウイルスはコクサッキーウイルスA(CA)16型が10件、パレコウイルスが9件、ライノウイルスが5件、CA6型が4件、CA2型・4型・5型・10型がそれぞれ1件、エンテロウイルス71型が1件、単純ヘルペスウイルス1型が1件であった。(4例の重複感染、1例の3重感染あり)

(文責 信田)

手足口病

線 (H25年第1週～第52週)

棒 (H26年第1週～第52週)



線 (H17年第1週～H26年第52週)

